
666通目のメール

嵐風嵐

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

666通目のメール

【著者名】

Z33331G

【作者名】

嵐風嵐

【あらすじ】

最近、「666」という数字がやけに目に付く。どうやらオレの運は不吉な方向に向かっているらしい。そんな中、オレに666通目のメールが届く。

(前書き)

いつも。初めて短編とこつものを書いてみました。ためしに、という感じですので、感想・評価などをよろしくお願いします。

「666番田のメール」

666。

確かに、ヨハネの默示録がなんとかで、そんな数字があつたように思つ。オレの乏しい知識を頼りにすれば、幸運のしるしではないはずだ。だが、そんな事、オレにはどうでもよかつた。 はずだつたのだが。

一昨日、オレはこう質問された。

「1)の前のテスト、合計点何点だつた?」

クラスメイトからの質問に、オレは何の気なしに答える。

「ええとだな……ちょっと待てよ。……666点」

その時点では何も考へていなかつた。質問してきた奴も、別になんとも思わず、自分の点数と出来を話し始めた。

その翌日も、666に関係することがあつた。

「あれ、今日何日だつけ?」

部活が終わり、家へ向かつて友達と肩を並べて歩いていると、ふとあるテレビ番組の事を思い出し、そいつに日付を聞いた。

「今日? 6月6日でしょ?」

「あつ。じゃ今日じゃねえか、JBSの特番」

「6時からの? 僕も見ようと思つてたんだ、それ」

6月6日6時から。その時も、何も考えずにただ過ごしていた。だが、さすがに今日もその数字を目にすると不思議に思つた。

最近出たゲーム、「燃やせ狩魂!! the 3rd」のプレイ時間が66時間6分だつたんだ。オレはどこかで聞いたような數だなと思い、辺りを見回すと、壁にかけてあつたカレンダーに目が行つた。昨日は6月6日だ。その時、昨日の会話が脳裏に煌めいた。

それと同時に、一昨日の会話も蘇る。テストの合計点、666点。昨日は、6月6日6時……。そして今日は66時間6分のプレイ時間……。全て、「666」だ。

オレは首をひねった。これは単なる偶然なのか？ 偶然にしては出来すぎじゃないか。何かに取り付かれているのか？ 少し心配になつたオレは百科事典を取り出し、「ヨハネの默示録」について調べ始めた。

……あつた。ふむ、ふむふむ。なるほど。「666」つてのは獣の数なのか。不吉……らしいなどうも。何だコレは？ オレの運が尽きたつて証明かい？ しかも皮肉なことに、それが載つているページ、666ページだ。コレは本当にヤバイかもしね。何か恐くなつてきたぞ。

その時、何かが小刻みに震える音が耳に入ってきた。オレは驚いて音のした方を見た。正体は分かつていたが、今みたいな時にこんな音がすると、驚くぜ？

オレはおもむろに携帯を開いた。一通のメールが受信されていた。その内容はこうだ。

『悪い、英語の宿題何ページだっけ？』

ふうむ、どこだつたかな。オレは宿題のページを確かめ、携帯に打ち込む。そして、送信。即効で返信が来る。

『サンキュー　ちなみに受信メール1000通目！』

おつ、ちょっと嬉しいじゃないか。さて、オレは今どれくらいなんだろうか。

……663通、だと？ 後三通で666通じゃないか！ コレはやばいぞ。いつもだつたら何も気にしないが、今となつては大騒ぎだ。後三通で何が来る？ 何が起こる？ 待て、誰だ？ 三通目は誰だ？ そいつはもしかしたらオレにとつて不吉を呼ぶ者なんじやないか？

言いようのない不安に襲われた。オレは恐くなつて携帯をベッド

に放り投げた。

くそつ、とにかく、今日は寝よう。

次の日。オレは学校の机でうなだれていた。
「何でそういうんだよ……」

唐突だが、オレには好きな女子がいる。時々メールするが、それほど親しくもない。まあ、同じクラスなわけだが……。で、どういう風の吹き回しか知らないが、もしかしたら「666」の連発で不吉になつてたからか、オレはそいつに告白する事になつた。全く、罰ゲームだぜ？ 断ることは出来ない。事もあるうか、オレが提案したんだからな。ちくしょう。純粋無垢な高校生が、何を中心学生みたいなことやつてんだか。しかも、今のオレの運気は全くの0と言つていい。余計な運を「666」に使つてしまつた。どうすんのよ、オレ！

そして遂に運命の時がやつてきた……。放課後の校舎、教室の前。人影はない。

目の前に、アイツがいる。「うう……無理だ。絶対無理だよ！ 心拍数が異常なほどまでに上がる。だが、ここで変な姿を見せれば、振られる確率が増加するに決まつてる！」

「えと……何？」

口を開きやがつた！ こう聞かれたら黙つてるわけには行かない！ もはや後戻りは出来ないんだ……とほほ。

「あのね……前から思つてたんだけど」

そろそろ察したようで、彼女は緊張した表情だ。オレはゆっくりと、次に続く言葉を口から発した。

「お前と、付き合いたい……」

うわあああっ！ オレの口からまさかこんな言葉が出ようとまつ。穴があつたら入りたい。いや、穴じゃなくても、なんでもいい。この場から離れたい！

「ごめん、ちょっと考えさせて……」「

そう言つて向こうの方から走り去つていつた。彼女が見えなくな

「オレはその場に力竭きたぬうて倒れこんだ。

「ああ ああ ああ」

今田返事が来るにしても、明田から会いづらいじゃないか。うう……。まだ振られたわけじゃないのに、何だこの悲しさは。こんな事なら罰ゲームなんて言うんじゃなかつた……。

それからオレはずつと落ち着かず、ご飯のときも食欲がなく、母さんに心配された。ご飯から部屋に戻ると、一通のメールが着ている。664通りのメールだ。666通りまで、後一通。送信主は、今日オレと一緒に遊んでいた（例の罰ゲーム付きの）奴だ。

『返事』

今返信を送れば、必ず数通は続くはずだ。つまり、666番目のメールは「イツ」という事になる。大丈夫だよな？ やすがにアイツからの返事が666番目にはなつてほしくない。

『まだ。来る気がしない。つてか明日からどうすんのよ、オレ（泣）

送信ボタンをプッシュ。オレはほあーっと長い息を吐き出した。
さつきから緊張しつぱなしだな。すぐ返事が返ってきた。『オレは6
65通田だよな……。』

『どんまい（笑）さすがに今日中には来るだろ』

今日中？　オレは時計を見た。今は夜の十時を過ぎた頃だ。アイツ……大体、いつも十一時くらいに寝るつづつてたような……。

携帯が鳴った。666通目のメールだ。唾を飲み込む。そつと、
携帯を開く。深呼吸。
……誰だ！？

息が出来ない。声が出ない。心臓が信じられないくらい早い。「じょっ……だん、だろ?」

小さく声が漏れた。思考が停止している。オレは微動だにせず携帯の画面を見つめた。666通目のメール。送信主はアイツだった。嫌な予感が的中した。それを見た瞬間涙が出そうになつたが、その文面を見た瞬間、時間が止まつた。

『あたしも付き合いたい。ずっと考えてたケド、やっぱりあんたが好き』

ゆつくりと時が動き出す。笑いがこぼれる。

何が666だ？ 何が不吉だつて？ 何が歓だ？ ふざけんな神様！ 単なる偶然だつたんじゃないか！

「ハハハハハツ」

オレは狂つたよつに笑い出した。馬鹿みたいだ。666なだけであんなに不安になつて。みんな、666は不吉な数字なんかじやないぜ。幸運の印だ！ あはははは。

それから、オレは彼女と付き合い始めた。一人が暇な休日にはゲーセンとか行つたし、この前は映画も見に行つて、傍から見れば上手く言つていよいよ見えると思つが、実は付き合い始めて確信した事がある。

アイツのわがままさは尋常じやなかつた。オレは大抵、彼女に振り回されているんだ。

そう、まさに彼女は獣のようだつた。

(後書き)

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3331g/>

666通目のメール

2010年11月28日18時25分発行